

## 問題解決学習で子どもを育てる

森 山 毅 一<sup>1)</sup>・山 根 栄 次<sup>2)</sup>

社会科から発展した総合的な学習として、小学校第4学年において「ゴミの問題を考える」というテーマで授業を実践した。本研究は、問題解決学習によって、子どもの主体的に学ぶ意欲と力を育て、学んだことが生活に生かされるようになったか、その有効性を探ったものである。

キーワード：問題解決学習、総合的な学習、切実な問題、ゴミの減量

### 1 はじめに

社会科は、社会事象を追究していくときに必要となる知識や技能を、多角的に取り入れていく総合学習の性格を持つものとして誕生した教科である。子どもが自ら問題を発見し、教科の枠にとらわれず、見通しを持って調べ、考えていく活動こそ社会科が本来めざしてきたものである。

昭和22年に新設されたこのような社会科の初志からすれば、総合的な学習と同じところをめざしているといえる。

ただ、社会科の内容は指導要領で決められているが、総合的な学習の内容は指導要領には例示としてしか挙がっていない。あえて区別をするなら、社会科である単元を進めていて、指導要領の内容に当てはまらないものは、すべて総合的な学習として捉えればよいと考えている。

そして、社会科でも総合的な学習でも大事にしたいことは、子どもたちに、問題解決学習を経験させるということである。

ここでいう問題解決学習とは、自分の願いをもとにして問題意識を持って事象を捉えることで見えてくる問題を、切実なものとして追究していく学習のことである。

問題解決学習では、すっきりとした解決や共通の答えを得ることを目標としない。他者と関わり合いながら粘り強く追究をしていく中で、

自分の考えが深まることが解決であり、自分なりに考えつづけていく火種が残ることを重視する。

そして、問題解決学習を経験させることで子どもの主体的に学ぶ意欲や力を育て、学んだことが生活に生かされるようにしたいと考えている。

ここでは以上のような考え方に立ち、問題解決学習で子どもを育てるということについて、社会科から発展した総合的な学習「ゴミの問題を考える」における実際の学習活動を中心に振り返りながら考察したい。

### 2 問題解決学習で子どもを育てるために

問題解決学習を経験させることで、子どもの主体的に学ぶ意欲や力を育て、学んだことが生活に生かされるようにするために、本単元では次の2つのことを大切にしたい。

- ① 子どもの願いや問題意識が単元の柱となるように目標や学習計画を立てる。
  - ② 子どもが切実な問題を持って追究を続けていくように学習過程を工夫する。

そして、本単元では、N子を中心に位置づけ変化を見ていくことにした。この子は、興味や関心があることには意欲的に取り組むが、粘り強さに欠ける子どもでもある。また、授業中の発言や休み時間の友だちとのやりとり、掃除の仕方において、自己中心的な言動が多い子どもである。

そこで、この単元では、粘り強く追究を続け

1) 三重大大学教育学部附属小学校

2) 三重大大学教育学部

ることで自分の考えを深めさせたり、相手の立場にたって物事を考えることの大切さを学ばせたりしたいと考えた。

### 3 実際の学習活動とその考察

- (1) 子どもの願いや問題意識が単元の柱となるように目標や学習計画を立てる

子どもたちは、2学期に行った社会科の「くらしとゴミ」という学習で、家庭や事業所から出されたゴミがどのようにして処理されるのかを調べる中で、ゴミを処理する人たちの苦労や願いに気づくとともに、それらの人々の働きは、衛生的な環境を維持するために必要であると考えられるようになった。

また、ゴミを出すときのルールが守られていないという問題を見つけ、そのことが原因で、埋立処分場の寿命が短くなってしまうことや、ゴミの資源化が進んでいないことにも気づいていった。

さらに、様々な種類のゴミを大量に出すようになった自分たちの生活の在り方にも問題があると考えられるようになった。

そして、ゴミの処理を改善するためには行政や企業、市民の協力が必要であり、自分たちも地域社会の一員として、少しでも改善するための活動に取り組むたいと考えるようになった。

つまり、ゴミの学習を通して、次第にゴミが持つ社会的な問題に気づき、解決していかなければならない実践的な課題として実感するようになったのである。

社会科の学習内容が一通り終わった段階で、子どもたちにこれから取り組んでいきたいことを聞いてみた。

すると、次の3つが挙がってきた。

- ① ゴミ出しのルールが守られていない集積所を改善するための活動
- ② 自分の家から出るゴミを減らすための活動
- ③ 歩道に落ちているゴミを拾う活動

N子は、社会科のゴミの学習を通して持つようになった願いや問題意識をもとに、①や②の活動に取り組むたいと言ってきた。

③の活動は、学校前で歩道のボランティア活動を熱心に続けていた子どもたちが、ゴミの学習とつなげて持つようになった願いや問題意識をもとに言ってきたものである。

そこで本単元では、子どもの願いや問題意識が単元の柱となるように、以下のように目標と学習計画を立てた。

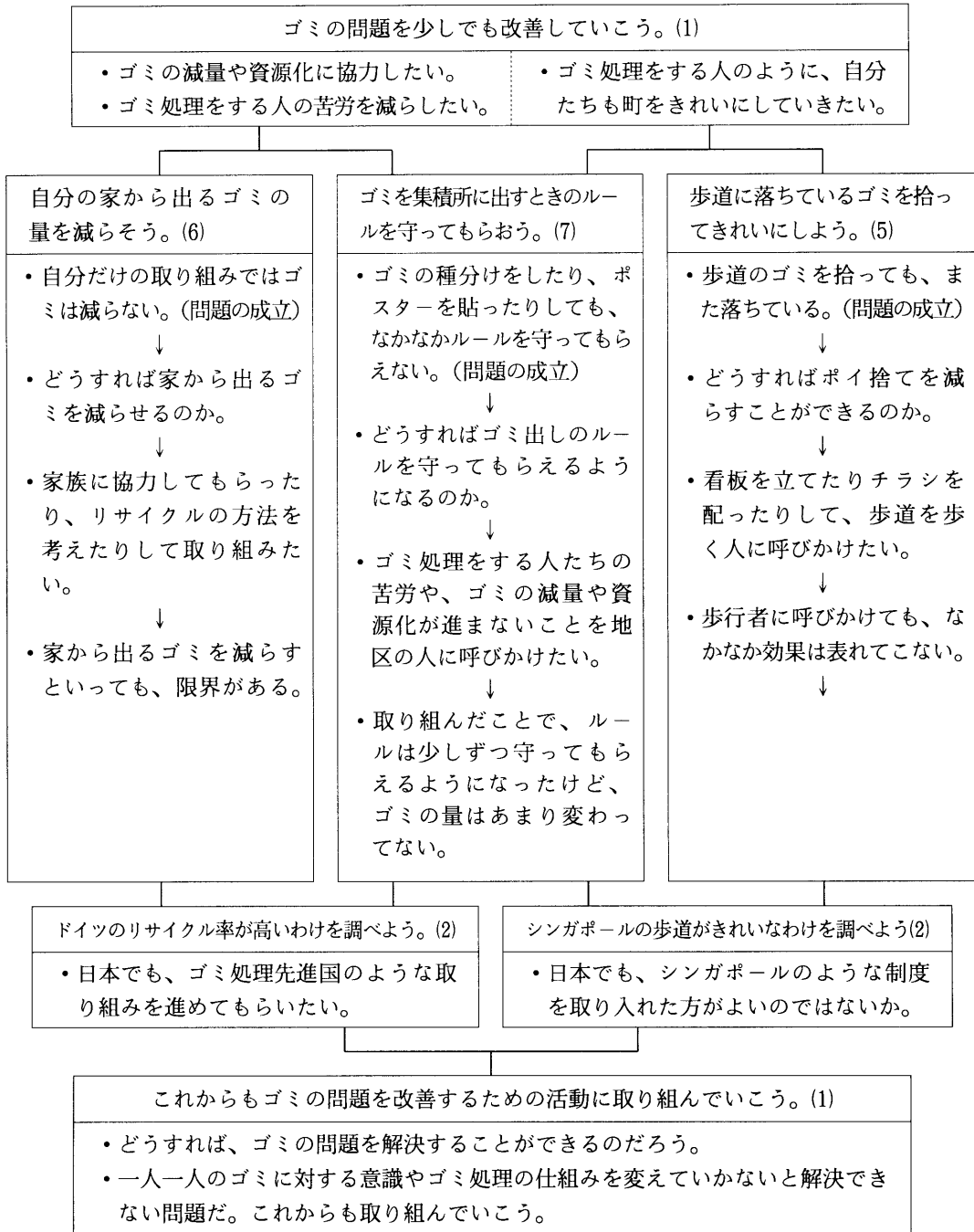
そして、ゴミを出すときのルールが特に守られていない学校周辺の集積所や、歩道に落ちているゴミが多い津駅周辺を取り上げ、調査、観察活動を行うことで見えてくる問題を切実な問題として捉え、その改善に向けて、自分には何ができるかを考えたり、実際に行動したりする活動に取り組ませることにした。

また、自分たちのこれまでの生活を見直して、ゴミの減量や資源化を図るための活動に取り組めるとともに、ゴミ処理先進国の取り組みについて調べることで、今後、どのようにゴミの問題を改善していけばよいか、行政や企業、市民の取り組み方について自分の考えを深めさせることにした。

#### <目 標>

- ① ゴミを出すときのルールが特に守られていない集積所や落ちているゴミが多い歩道を、衛生的な環境に改善したりゴミの減量や資源化を図ったりするためのパトロール活動に取り組むとともに、ゴミを大量に出す自分たちのこれまでの生活を見直し、家から出るゴミを減らすための活動に取り組むようになる。
- ② パトロール活動や家のゴミを減らす活動を続けるとともに、その効果があがるように活動内容を見直したり関係者に相談したりして自分のできる新たな活動に取り組むようになる。
- ③ ゴミの処理や歩道の美化が進んでいる諸外国の体制や市民の意識について調べる中で、今後、どのようにゴミの問題を改善していけばよいか、行政や企業、市民の取り組み方について考えるようになる。

<学習計画（24 時間）>



(2) 子どもが切実な問題を持って追究を続けていくように学習過程を工夫する

子どもが、自分の願いを学習過程のある場面で自覚し、それをもとにして物事を見ていこうとする姿勢を、問題意識があると考えている。

そして、問題意識を持って物事を見るから、自分の願いと対立している事象として、願いの実現を阻んでいる問題を捉えることができるといえる。

さらに、自分の願いと対立する事象が、深刻

なものとして意識されることで、問題は切実なものとなり、その子の粘り強い追究が生み出されていくと考えている。

本単元では、子どもが切実な問題を持って追究を続けていくように、問題の解決策を様々な角度から吟味させたり、驚くような資料を提示したり、問題を自分の問題として捉え直させたりするようにした。

#### ① ゴミ出しのルールが守られていない集積所を改善する活動における追究

まず、学校周辺や津駅周辺で、子どもたちから挙がってきたルールが守られていない集積所10カ所のパトロール活動を行い、集積所の様子を確かめさせたり、ルールを守ってもらうための活動に取り組ませたりした。この活動をきっかけにして、それぞれの子どもが自分の気になる集積所で、取り組みの成果があるかを気に掛け、パトロール活動を続けていくと考えたからである。また、何度取り組んでもルールが守られない集積所の状態は、切実な問題として追究させることができると考えた。

N子は、ゴミ処理する人の苦労を減らすためにルールを守ってほしいという願いを持ち、観音寺橋下の集積所で活動に取り組んだ。活動の内容としては、ゴミの種分けやペットボトルのキャップを取る活動、友だちが作ったイエローカードを違反ゴミに貼るというものであった。また、時には、ルール違反のゴミを出しにきた人に注意することもあった。

取り組みを始めて約1か月したところで、子



パトロール活動をする子どもたち

どもたちに、ルールが特に守られていない集積所を聞いてみた。

すると、観音寺橋下の集積所が挙がってきた。パトロール活動に取り組んできても、一向に改善されない状態が続いていたし、収集車が行った後でも、たくさんのゴミが残っていたり消火器やガスボンベといった市では収集しない物も出されていたりしたからである。

そこで、思ったことを出し合わせると、N子は授業の中で次のように言ってきた。

私は、ルール違反をしてゴミを出しにきた人に、ゴミを集める人が困るからルールを守ってほしいと言っても文句を言われたし、いろいろやってきたけどルールは全然守られてないから、このままパトロールを続けても、多分ルールは守ってもらえないと思います。

でも、ゴミが残ってないきれいな集積所になってほしいから、何か違う方法を考えてないといけなかったと思います。

この発言からは、ルールが守られていない集積所の状態を、切実な問題として捉えていることがわかる。また、ルールを守ってほしいという願いを持ち続け、何とかして解決したいという意欲が伺える。

観音寺橋下の集積所のパトロール活動に熱心に取り組んできた他の子どもたちからも、同じような意見が出てきたので、次の授業では「観音寺橋下の集積所では、どうすればゴミ出しのルールが守ってもらえるようになるか。」という学習問題で話し合わせた。そして、解決策を出し合い、様々な角度から吟味させることで、自分の考えを深めさせたいと考えた。

子どもたちから出された解決策は、次の8つである。

- A. 集積所には、カンとビンの札しかない  
ので、他の種類の札を付け足す。
- B. 今のポスターとは別に、ゴミ処理する  
人の苦労やゴミの減量・資源化の大切さ

を書いたポスターを貼る。

- C. ルール違反の種類によってイエローカードの内容も変えて貼る。
- D. チラシを作って、ゴミを出す家に配る。
- E. 収集する人に、本物のイエローカードをどんどん貼ってもらう。
- F. 隣の地区の人に、全てのゴミを自分たちの地区の集積所に出してもらう。
- G. 集積所に鍵をつけてもらう。
- H. 集積所の入れ物を、無くしてもらう。

そして、様々な角度から吟味させるために、「この方法で、ルールは守ってもらえるようになりますか。」と問うことで、それぞれの解決策について次のような問題点が明らかになってきた。

<A. B. C. Dに対して>

自分の都合しか考えてない人には利き目がない。自分たちの活動にも限界がある。

<Eに対して>

本物のイエローカードが貼られても、収集日には持って行ってしまうので、また違反ゴミが出る。

<Fに対して>

観音寺橋下の地区の人にルールを守らない人がいるから、結局、違反はなくなる。

<Gに対して>

鍵をかけるようになると、集積所の外にゴミを置いていく人が出てくる。

<Hに対して>

入れ物には約50万円かかっているので無くしてもらうわけにはいかない。

N子は最初、チラシを作って配るという考えと、入れ物を無くしてもらうという考えを持って授業に臨んだが、それらを出すことはなかった。

実際の発言は、Aの考えに対して、「パトロール活動で種分けをしてきたが、次の日になると

グチャグチャになっていたから、札を付けても場所は守ってもらえないと思う。」という反論と、Gの考えに対して、「1月7日にパトロールをしたとき、集積所の中がいっぱいでアルミサッシの枠が外に5、6枚出してあったから、鍵を掛けると外に置いていく人が出てくると思う。」という反論を出すだけであった。

そして、その次の授業も同じ学習問題で話し合わせたところ、N子は次のように言ってきた。(数字は授業記録の中の発言番号)

65 私も、チラシを作って1軒ずつ配るという意見はいいと思います。わけは、チラシを配ったら、何かと思って、読んでくれると思うし、それにチラシを配るという活動は、まだやったことがなくて効くのか効かないのか分からないから、一度やってみたいです。

108 私も教会の人に注意したんだけど、(中略)次の日は燃やせるゴミの日だったのに、持ってきたのは燃やせないゴミで、そうやってルール違反する人もいるんだから、やっぱり自分たちの地区の集積所に全部のゴミを出してもらうというのをお願いしたいです。

142 それで、外に置く人が出てきたら、もう入れ物を無くしてもらった方がいいと思います。わけは、鍵をかけてもらって、外に置かれたら意味がないし、入れ物を無くせば、カラスにつつかれたりネコに荒らされたりしてグチャグチャになったら、嫌だと思ってルールを守ってくれるようになると思うから、鍵を付けてもらって、もしダメだったら入れ物を無くしてもらえばいいと思います。

65や108の発言からは、前時に反論が出ていたにもかかわらず「一度やってみたいです。」「お願いしたいです。」というように、活動に取り組もうとする意欲が感じられる。

また、142の発言は、鍵を付けてもらうという解決策と、入れ物を無くしてもらうという解

# ゴミ出しルールを守って

- ① ペットボトルは、キャップをと、て出して  
ください。  
キャップをとらずにペットボトル又はビン  
を出すと、ペットボトルのキャップをとる  
人が大変です。少しでも、キャップを省くため  
に、ちゃんとキャップをと、て出してくだ  
さい。
- ② 竹ぐし、ガラスのはへんが入、ているご  
みは竹ぐしが入、ていますなどの表しを  
してください。  
ゴミを収集する人が手にささ、たりして  
いて、2 はりぬ、た人がいます。などの  
竹ぐし、ガラスのはへんをふくろの中に  
入れたときは、表しをしてください。
- ③ 布類、古紙、牛に、うパツリ、ペットボ  
トル、はしげん化できる物です。しげん  
ゴミとして出してください。  
11月28日、ゴミを収集したうち、  
99.9%はしげん化されませんでした。
- ごみしげん化に協力してください。  
そうすれば、しげんをむくにな  
ってまわりのごみをおかします。  
④ お店のゴミを観音寺橋下の集積  
所に出さないでください。  
観音寺橋下の集積所は家庭ゴミの  
ゴミを収集するところでは、事業所  
から出るゴミを収集するところでは  
ありません。なので、ごみは業者  
者にむけて、てもら、てください。
- ゴミ出しルール  
を守ってください！  
おねがいします。  
4B環境パトロール隊。

決策をつなげて考えを作ってきたといえる。

このようなN子の発言を振り返ると、前時には、それぞれの解決策が様々な角度から吟味される中で、どうすればルールを守ってもらえるようになるか、この子なりにじっくりと考えていたのではないかな。そして、話し合いで得た多くの事実や異なった考えを視野に入れることで、次の時間に自分の解決策を、どんどん言ってきたのではないと思われる。

その後、子どもたちは、自分がよいと考える解決策にそれぞれ取り組んだ。

N子は、自分の解決策をお願いする手紙を自治会長さんに出した。

また、チラシを作って観音寺橋下の集積所の地区に配る活動に取り組んだ。

立派なことと言っても、実行が伴わないことが多い子なので心配していたが、最後までやり遂げた。さらに、安濃川土手周辺の地区にもチラシを配る活動に取り組んでいることから、この子なりによく活動が続けたと感じている。

他にも、ゴミを処理する人の苦労を減らしたいという願いを持ってルールを守ってもらうための活動を始めていることや、活動続ける中

で「ゴミを出す家にも事情があるから、当日の朝にゴミを出せない家があっても仕方ない。」と発言していることから、相手の立場にたって物事も考えるようになってきたと思われる。

2週間ほどすると、集積所の様子も以前と比べると、ゴミの種分けもできて、収集車が回った後に残るゴミも減ってきたという報告がされるようになった。しかし、N子は「ゴミ出しのルールは少しずつ守られるようになってきたけど、全体のゴミの量は減っていない。」という発言をした。このことは、ゴミを減らすという視点から新たな問題を捉えているといえる。

(2) 自分の家から出るゴミを減らす活動における追究

まず、子どもたちには、自分の家から出るゴミを減らすための方法を考えさせた。そして、実際に取り組んだことや、1週間に出たゴミの量の増減を記録させ、授業で出し合わせた。

そうすることで、ゴミが減らない状態を問題として捉えさせたりゴミを減らすための新たな方法を考えさせたりできると考えたからである。

また、何度もこの活動に取り組めば、やがて

はこれ以上ゴミを減らすことができないということを実感した問題として捉えさせることができると考えた。

N子は、3回の取り組みの結果を、それぞれの授業で、次のように報告した。

＜1回目＞	0.3kg減
<ul style="list-style-type: none"> <li>・御飯を残さずに食べた。</li> <li>・セロテープは失敗するとゴミになるので糊を使った。</li> </ul>	
＜2回目＞	3.4kg増
<ul style="list-style-type: none"> <li>・こぼしたお茶を1枚のティッシュで拭いた。</li> <li>・小さな箱を捨てずに小物入れにした。</li> <li>・料理のとき、野菜を最後まで使ってもらった。</li> </ul>	
＜3回目＞	1.9kg減
<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族に呼びかけて御飯を残さないようにした。</li> <li>・節分でまいた豆を、犬に食べさせた。</li> <li>・ティッシュを使わずに雑巾を使うようにした。</li> <li>・ペットボトルや牛乳パックをスーパーのリサイクル箱に入れた。</li> <li>・家から出るゴミで、リサイクル品を作った。</li> </ul>	

そして、2回目の報告で、取り組みを工夫したのに3.4kg増えてしまったことから、このことを問題として捉えた。

そこで、「同じような取り組みをしているのに、どうして減らない家があるのか。」という課題で話し合わせると、「家族の協力が足りないのではないか。」「ゴミの種類にあわせてリサイクル品を作っていないからではないか」といった、解決策につながる意見が出された。

また、家から出るゴミを減らすためには、紙類や生ゴミといった燃やせるゴミを減らすと効果があることも確かめ、もう一度取り組むことになった。

3回目の報告では、ゴミが減ったという子どもたちの方が多くなった。N子の家でも、取り組みの数を増やしたり新たな方法で取り組むことでゴミは減った。

また、N子はこの時期、リユース品作りに意欲的に取り組んだ。使った割り箸をためておいて小物入れを作ったり、ダンボールと紙粘土で写真立てを作ったり、ペットボトルを小さく切ってプレスレットを作ったりしては朝の会で報告した。リサイクル品作りに興味を持ったこともあるが、どれも失敗を重ねながら時間を掛けて作っていたことから、根気よく取り組む姿勢が付いてきたといえる。

それぞれの子どもが3回目の報告を出し合った後は、「これ以上ゴミを減らすことができるか。」という課題で話し合わせた。

そして、様々な方法に取り組んでいる者にとっては、これ以上減らしにくいことが明らかになったところで、以下のような日本とドイツのリサイクル率を示した表を見せ、思ったことを話し合わせた。

ドイツのリサイクル率は、日本の6倍以上もある。このことを知れば、ドイツのゴミ処理の体制や仕組みに興味を持ち、追究を進めることで、ゴミを減らすための新たな解決策を作り出す子どもが出てくると考えたからである。

日本全体	(平成8年)	10.7%
津市	(平成10年)	8.7%
ハイデルベルグ市	(平成7年)	65.4%
エアランゲン市	(平成8年)	75.1%
フライブルグ市	(平成8年)	63.1%
ドイツ全体	(平成8年)	60～70%

日本とドイツのゴミのリサイクル率

子どもたちは、ドイツのリサイクル率の高さに驚き、「なぜ、こんなにリサイクル率が高いのか。」「ドイツでは、どんな取り組みをしているのか。」といった疑問を中心に追究を進めていった。

調べ活動が続く中、村崎は「次期埋立処分場が予定されていた白山町が白紙撤回をした」という新聞記事を報告した。白銀環境清掃センターの埋立はあと6年が限度であり、次の埋立処分場が決まっても、施設を建設するには5～6年かかることから、一刻の猶予も許されないとい



うのである。

N子は、このことを知った後、プリントに次のように書いてきた。

ゴミを捨てられる期間が、あと6年しかないと思うとこわいです。もしも出せなくなったら、どうなるのだろう。

住民に引き続き理解を求めていくと書いてあって、白山町の人には許可してもらいたいけど、白山町に住んでいる人の気持ちもわかるな。

埋め立てられなくなると、本当にどうなってしまうのだろう。

このプリントからは、埋立処分場の寿命があと6年しかないことを、深刻な問題として捉えていることがわかる。また、この子なりに白山町に住んでいる人たちの立場も考えている様子が伺える。

その後、N子は、ドイツがゴミを減らしたり資源化を進めたりした経緯を意欲的に追究していった。

そして、以前はドイツでも日本と同じようにゴミの問題が起きたことで、製造者が包装材を回収してリサイクルする責任を負う法律が作られたことや、製造者の代わりに包装材を回収・リサイクルする会社（DSD社）が設立され、リサイクル率が飛躍的に伸びたことを明らかにしていった。

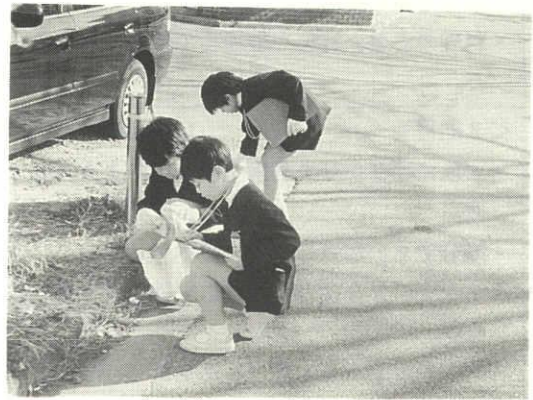
また、授業の中で、ドイツでは、家庭から出るゴミが有料であることや、ビンのデポジット制が進んでいることなどが明らかになり、「日本でも、ドイツの取り組みを1つでも真似したらリサイクル率が高くなるかもしれない。」と発言している。

このようにN子は、追究を進める中で、これ以上ゴミを減らすための解決策が見つからないという問題や、次期埋立処分場建設のめどが立たなくなってしまうという問題が、切実なものとなることで、ゴミの減量を進めたいという願いを持ちながら、粘り強く追究していったといえる。

さらに、家から出るゴミを減らすために、食べ残しをしないようにしたり、ティッシュやノートなど紙の無駄づかいをしないようにしたりする取り組みは続けられていることから、学んだことが生活に生かされるようになってきたといえる。

### (3) 歩道に落ちているゴミを拾う活動における追究

まず、歩道に落ちているゴミが多い場所を予想させた後、全員で、津駅東口や学校周辺の歩道でゴミを拾う活動を行った。



津駅周辺でゴミ拾いをする子どもたち

結果は、津駅東口周辺が2,150個、学校周辺が1,421個であった。

そして、思ったことを出し合った授業では、「今まで道を歩いていたが、こんなにたくさんのゴミが落ちているとは思わなかった。」という意見や、「もっと歩道のゴミ拾いをして、減らしていきたい。」という願いが多くの子供たちから出された。

N子は、この学習をきっかけにして、下校の途中、自主的にゴミを拾う活動に取り組んだ。3回の取り組みであったが、740個のゴミを拾っている。そして、プリントには「タバコがいつも多いので、大人はいい加減にしてほしいです。」という感想を書いてきた。

長続きはしなかったが、この子なりに問題意識を持って取り組むことで、タバコの吸殻のポイ捨てが多いという状況に問題を感じているといえる。



取り組みが始まって1か月ほどすると、学校の行き帰りに歩道に落ちているゴミを拾う子どもはたくさん出てきたが、校舎内に落ちているゴミを拾わない子どももいることが気になった。

そこで、学校に落ちているゴミを拾う活動にも一斉に取り組ませた。歩道では落ちているゴミを拾う活動をしているのに、学校の中では拾っていないという矛盾を、自分の問題として捉えさせようと考えたからである。

何人かの子どもは活動が終わった後の話し合いで自分の行動に矛盾を感じ、学校の中でもゴミが拾えるようになりたいと発言したが、N子は「私は気がついたときは、拾っている。」と言って自分の問題とはしなかった。

その後、もう一度、学校周辺の歩道でゴミを拾う活動を行った。結果は2,087個と、前回の調査より666個増えた。

子どもたちは、このような状況を問題として捉え、いくつかの解決策を出してきた。N子も、ゴミ箱を置くことや看板を立てることなどの解決策を出してきた。

しかし、シンガポールに行ったことがあるK子から、「ゴミのポイ捨てをすると罰金があるらしくて、歩道はすごくきれいだった。」という発言が出たことで、子どもたちの関心はシンガポールの制度に向いていった。

そして、調べ活動によって、罰金の他にもポイ捨てをして2回以上有罪になると、CWOという清掃活動をさせられることや、日本でもいろいろな地域でゴミのポイ捨て禁止条例が出ていて、罰金の制度もあることを明らかにしていった。

#### (4) ゴミの問題を解決するための方法を話し合う活動における追究

単元の最後には、「どうすれば、ゴミの問題を解決することができるのか。」という課題で話し合わせた。

N子は、今まで追究してきたことをもとに、ゴミ出しのルールを守ってもらうためには、ゴミ袋に名前を書いたりルール違反をしたときには罰金にしたりするという考えを言ってきた。

また、ゴミを減らすためには、容器包装リサイクル法で製造者がリサイクルできる物を作ったり包装材を減らすようになってから、一般ゴミの有料化を進めた方がよいと言ってきた。

さらに、歩道に落ちているゴミを減らすためには、罰金の制度をもっと広めたり何度も捕まった人はシンガポールのように清掃活動をさせたりすると言ってきた。

そこで、他の子どもたちからも一通りの考えが出てきたところで、「これらの方法で、本当にゴミの問題は解決しますか。」と聞いた。どのような取り組みをしても、人間が生きている限りゴミは何らかの形で出されることに気づかせ、解決できない難しい問題であることを捉えさせようと考えたからである。

話し合いが進む中で、N子や他の子どもたちは、ゴミを減らすことはできても、無くすことはできないという深刻な問題に気づき「解決できない。」と言ってきた。

そして、数分間、沈黙が続いた後、F子が、「解決できないかもしれないけど、みんなで協力して、解決に近づきたい。」と言ってきた。その後、他の子どもたちも同じような意見を出してきたところで授業を終えた。

話し合いの後に書かせたプリントにN子は、次のように書いてきた。

ゴミの問題は、完ぺきには解決できないけど、私たちがもう無理だと思ってあきらめのじゃなくて、解決の近いところまではがんばらないといけないなと思いました。

今、ここで活動をやめると、ゴミの問題は増えていくので、これからも続けて減らしていきたいと思いました。

初めは、ゴミ問題って自分には関係のないことだと思っていたけど、この勉強で、自分のくらしにもとても関係がある問題だと考えるようになりました。

このプリントからは、F子の発言に影響を受けたこともあるが、自分なりにゴミが持つ深刻な問題に立ち向かっていこうとする意欲が感じ

られる。

また、他者と関わりながら粘り強く追究を続けるうちに、ゴミの問題は自分の生活にも関係が深い問題として捉えるようになったことからこの子の考えが深まった状態にあるといえる。

さらに、ゴミの学習を振り返る作文では、今も気になっていることとして、まだ観音寺橋下の集積所ではルールがしっかり守られていないことや、日本のリサイクル率がまだまだ低いこと、埋立処分場があと6年しか持たないことを挙げている。

これらのことは、今後も自分なりにゴミの問題を考えていこうとする火種を残しているといえよう。

#### 4 まとめ

この単位ではN子を中心に位置づけてきたが、他の子どもたちにも様々な変化が見られた。

例えば、粘り強さに欠けるという点でN子と同じような傾向があったO男は、自分の家の近くにある集積所のルールが守られていないことを問題として捉え、ルールを守ってもらう活動に取り組んだ。

しかし、パトロール活動で、自分の家が出したルール違反のゴミを見つけることで、そのことを切実な問題として捉えるようになった。そして、ルールを守ってほしいという内容のポスターを作って、まず、家の台所に貼ったのである。その後、自分の家がルールを守れるようになったら、集積所にポスターを貼るということであった。

逆に、粘り強さはあるが、主体的に活動を進めていくことができないという点で気になっていたI子は、ルールが守られていない集積所のパトロールを毎日続け、ルールを守ってほしいという願いから、自分からイエローカードを違反ゴミに貼ったり、ポスターを作って集積所に貼ったりするようになった。

また、食べ物の好き嫌いが多かったS男は、埋立処分場があと6年しかもたないことを切実な問題として捉え、いつも残していた給食を全

部食べるようになったし、物を大切にしない傾向があったM男は、何かをこぼしたときティッシュを使わずに雑巾で拭いたりノートの節約をしたりするようになった。

そして、3ヵ月の間に、子どもたちのパトロール回数は延べ631回にのぼり、ゴミを減らすために作ったリユース品の数は58点となったまた、登下校の途中に歩道に落ちているゴミを拾った数は、9,177個であった。

以上のような子どもの姿からすると、願いや問題意識を単元の柱として学習計画を立てることや、切実な問題を持って追究を続けていくように、解決策を様々な角度から吟味させたり、驚くような資料を提示したり、自分の問題として捉え直させたりすることは、子どもの主体的に学ぶ意欲や力を育て、学んだことが生活に生かされるようになるためには有効であったといえる。

また、本単元の切り込み口は、環境学習であるが、ボランティア活動としての福祉学習や、国際理解学習の内容なども含む展開となり、追究が続いていくといろいろな学習につながっていくことがはっきりした。今後は、総合的な学習内容の例示として挙げっていない何かから、問題解決学習を通して子どもを育てていく実践を考えていきたい。

#### 注 記

本論文は、山根栄次が研究代表の「社会科学習と総合的な学習の連携の可能性」という研究テーマの成果の一部として報告したものである。